

大阪的 コミュニティの ニュースレター



Vol.2
夏号

発行日：2026年7月25日
(一財)大阪府コミュニティ協会



▲福島・野田の家並みを行く学生〔2024年5月撮影〕



▲「まち歩きガイド・鈴木さん」の後ろ姿とJR環状線・野田駅前に集合した学生〔2026年6月撮影〕

「福島・野田のまち歩き」2年前、そして今年

大阪の都市を代表する風景といえば、四天王寺に北御堂、ミナミヤキタ、大阪城に梅田スカイビル、巨大地下街、大阪城と通天閣、あべのハルカス、最近ではうめきた等々。では、人々が暮らす「街や町」の大阪的な雰囲気や風情を感じられるのはどんな場所でしょうか？

昔ながらの長屋、町工場、商店街のある風景、そして寺町などが挙げられるはずですが、一面一帯ほとんどがB29の焼夷弾で焼きつくされた大阪では、意外なほど「まち」そのものの名が挙げづらい環境下にあります。

そんな中、大阪市中央卸売市場（本場）がある福島区・野田地区は大阪的風情を代表できる「まち」といえます。歴史上でも、豊臣秀吉が大坂城を築く前、本願寺と織田軍が戦った「石山合戦」における「野田・福島」の戦いの地で、都市大阪が形づくられる「根っこ」の舞台であったことが史実にあります。近年では、世界に冠たるつる性植物「野田藤」発祥の地であり、その「野田藤」は、津田梅子の5000円札にドーンと描かれています。

そんな町に、長年ボランティアガイドとして活動されている鈴木和夫さんという方がおられます。そのガイドの名調子は、豊富な自作資料と共に、生活上の歴史や中央卸売市場との関係、また「今の暮らし」も交えた肉声が魅力的です。つまり「そこのおっちゃん」が名ガイド、抜群のクオリティです。

鈴木さんに初めて「若者向け」のガイドをお願いしたのは2年前。北区堂島の専門学校、大阪デザイナー・アカデミーイラストレーション学科の学生の皆さんに向け、案内してもらったのが最初でした。

学生を指導するのは、福永紀昭先生。まち歩きを通して感性的な刺激を得て、この町の姿を絵に託すことができたなら「いいな」とのことでした。

まち歩きの2か月後、作品が完成しました。福島・野田のまちを描いたそれらの作品は同年の夏から秋にかけ、中央卸売市場や野田コミュニティセンターで展示されました。地域の皆さんにも愛され、喜んでいただくことができました。

さて、同様の試みを、今年も同じ時期にやってみることにしました。参加した学生は2年前と同じ約35名。若者らしいとまどいを秘め、集合場所、JR環状線・野田駅前に集まってきました。

まち歩きがスタートしました。ところが、暫く歩いていると、2年前とは「街の表情」が少し異なることに気付きました。長屋が新しくキレイな戸建ての連なりに建て代わり、路地も一新されています。「あの旧家」も見えません。戦禍の延焼から逃れ、古い町並みが残っていたこの町にも、新しい安全・安心の家並みが整備されつつあるようです。心なしか・・・鈴木さんのガイド姿が寂しそうです。

開始から2時間半が経ち、お掃除が行き届きふんわりとした佇まいの野田恵美須神社でゴールを迎え、鈴木さんへの感謝の拍手を合図に解散しました。のちに鈴木さんに伺ったところ、問わず語りでこんな話が聞けました。「町は少しずつ変わりつつありますが、若い学生さんがどんな絵を描いてくれるのか、やっぱりとても楽しみです」。上の写真は、2年前の展示準備の様子です。これらはすべて、福島区まちづくりセンターのプロデュースと前出の福永先生の協力により実現したものです。



“大阪的”とは？ 大坂本願寺から大坂城、城下町へ

文：宮本裕次
(大阪城天守閣 前・館長 / 現・学芸顧問)



これは、2025 年 9 月に開催された大阪的シンポジウム第 3 回において、基調報告として発表した内容を編集したものです。

この続編は、2026 年 9 月開催予定の同シンポジウム第 4 回で発表いたします。

プロローグ

「大阪的」という言葉から思い浮かべるイメージには、自由闊達、自立自尊、あるいは建前よりも本音を重んじるといった要素が含まれるといえるでしょう。そこには、江戸時代の大坂は政治的な中心地ではなく、町人が主役で経済的な中心地だった、近くに怖い「お上」がいなかったのが顔色をうかがう必要がなかった、こうした江戸時代の大坂に対するとらえかたが、少なからず影響しています。江戸時代の江戸はいうまでもなく徳川将軍のおひざ元で武家政権の中枢、その江戸は、明治維新を経て東京となり日本の首都となりましたが、この東京への対抗意識も含まれているとみられます。

さて、「大阪的」を語るうえで外せないのが豊臣秀吉です。秀吉は天下人にのぼりつめ、大坂に城と城下町を築き、今に至る大阪の基礎を築きました。しかしご存じの通り、その大坂は徳川家康の謀略によって引き起こされた大坂の陣で、焼け野原になります。こうしたいきさつもあり、江戸時代には、大阪の恩人である豊臣をほろぼした憎い徳川の治世のもと暮らしている、といった複雑な思いが大坂人の中にあり、それが現在の大坂人の反骨精神や向上心につながっているのだ、とも語られます。

そうではない「大阪的」

とはいえ、そもそも「江戸時代、大坂は政治的中心地ではなかった」「江戸時代の大坂にはお上がいなかった」のは本当なのでしょうか。こうしたことについて、紋切型に見えてしまう「大阪的」思考から、そうではない「大阪的」へと一歩踏み出すため、いくつかの素材を紹介しつつ問題提起をしたいと思います。

まず、大阪の都市としての歴史を概観します。羽柴（豊臣）秀吉が大坂城の築城を開始し、城下町の整備に取りかかったのは天正 11 年、1583 年のことでした。しかしながら、その前にも大阪・

大阪城の歴史はありました。本願寺の時代です。

明応 5 年、1496 年、浄土真宗本願寺派第 8 世の蓮如上人によって今の大阪城の場所に坊舎が建立されました。これを起源とする石山御坊（大坂御坊）が天文 2 年、1533 年、浄土真宗本願寺派の拠点となり（石山本願寺・大坂本願寺）、寺内町ともども大きな繁栄をもたらしました。

ところが、織田信長が永禄 11 年、1568 に上洛し畿内の制圧に乗り出すと、本願寺と信長の対立は避けがたいものとなり、元亀元年、1570 年ついに両者は戦闘状態に入りました。いわゆる「石山合戦」です。天正 8 年、1580 年まで足かけ 11 年におよんだこの戦いは、今の大阪の地が舞台でした。

石山合戦の結果、本願寺は大坂を立ち退くことになり、大坂は信長の手に落ちました。しかしそのわずか 2 年後、信長は本能寺の変によって不慮の死を遂げてしまいます。「そもそも大坂はおよそ日本一の境地なり」（『信長公記』）とあるように、信長は大坂の地を高く評価していましたから、将来的には本拠を大坂へ移す構想を持っていたとみられますが、その可能性も断ち切られてしまいました。

本能寺の変の翌年にあたる天正 11 年、1583 年 6 月に賤ヶ岳合戦が起こり、秀吉は宿敵柴田勝家を破って勝利をおさめました。これによって秀吉は、自身を主役とする政権樹立に向けた第一歩を踏み出します。秀吉は勝利した直後に大坂をわがものにし、9 月に築城を始めます。秀吉はその後、大坂城の拡張や増強を生涯にわたって繰り返しました。

秀吉は城下町の建設も進めました。秀吉時代の大坂城を描いた「大坂城図屏風」（大阪城天守閣所蔵）には、城だけでなく、城下町の情景が住民の姿とともに描かれています。町人が魚を持って歩いている様子や、町家の中で男性二人が仲良く向かいあって食事をしている様子なども描かれています。

秀吉が慶長 3 年、1598 年になくなったあと、政治の実権は豊臣家から徳川家へと移っていきます。大坂城には、秀吉の息子の秀頼が豊臣家の後継者として権威を保っていたものの、結局豊臣・

徳川両家の関係は破綻を迎え、慶長 19 年、1614 年に大坂冬の陣、続く慶長 20 年、1615 年に大坂夏の陣が起こり、豊臣家は滅亡し、大坂城は落城しました。大坂夏の陣図屏風（重要文化財、大阪城天守閣所蔵）には、夏の陣で激突する両軍、落城の様子や逃げ惑う敗残兵や市民の姿が詳細に描かれています。落城とともに、大坂の町も壊滅しました。

さてこのあたりから、そうではない「大阪的」にかかわる話題に入っていきます。大坂夏の陣から 4 年が経った元和 5 年、1619 年、徳川幕府は大坂を幕府の直轄地とし、大坂城の再築を決定しました。工事は翌年から寛永 6 年（1629）まで行われました。この工事は、豊臣大坂城の跡を修理して石垣を積み足したり、焼けた建物を作り直したりしたものではありません。城の基本設計を改めて行い、石垣を基礎から積み直しています。豊臣大坂城とは別の城を同じ場所に築いたのです。

再築にあたっては、小豆島をはじめ瀬戸内海の島々や沿岸などから良質の花崗岩が集められ、積み上げられました。これによって豊臣大坂城は、分厚い盛土の下に眠ることになります。令和 7 年 4 月、今の天守閣のすぐ近くに公開施設「大阪城 豊臣石垣館」が完成し、昭和 59 年、1984 年に発見された豊臣時代の石垣（詰ノ丸石垣）を、地中から発見された状態のまま見学することができるようになりました。

今でこそ「豊臣大坂城と徳川大坂城は別物」という見方が定着しつつありますが、戦後の調査によってこの事実が判明するまでは、全くそうではありませんでした。戦前から戦後しばらくの間まで、ほとんどの日本人は、目の前に広がる大阪城の石垣や堀を見て、「これこそ太閤さんの城」と確信し、秀吉の豪快な気質、獲得した富と権力の大きさを実感し、大阪の人たちは心の支えにしていました。徳川幕府が大坂城を築き直したという記憶は、江戸時代を通じてすでにあやふやなものになっていましたが、明治維新以後になるとさらに反徳川・親豊臣の風潮によって閑却されていきました。

ともあれ、今、目の前に広がる大阪城は、少なくとも大阪人による「大阪的」自意識を支える秀吉の遺産ではありません。今の大阪城には「豊臣・徳川ふたつの城がある」という現実を受けとめた上で、改めて、そうではない「大阪的」をさぐる必要があるでしょう。

城下町としての大阪

豊臣時代から徳川時代に至る、大坂の城下町の広がりを確認します。大阪城と四天王寺を結ぶ上町の街道沿い、現在の中央区上汐、天王寺区上汐付近は、かつて「平野町」と呼ばれていました。これは、秀吉の城下町建設にあたり平野郷から住民を移住させ成立した町だったことを物語っています。秀吉が取り組んだ城下町建設はこうに、大坂城周辺および大坂城と四天王寺を結ぶルート沿いにおいてまず着手され、近隣から人々を誘致するなどの方法で

進められました。

秀吉は慶長 3 年、1598 年にこの世を去りますが、この年に秀吉は大坂城の防衛機能を強化するための工事を命じます。内容は、二の丸外側の大手口・京橋口・玉造口という 3 つの主要な出入口の外側を堀で囲む、強固な馬出曲輪（うまだしくるわ）を築くことでした。それまで、二の丸と、「惣構え」と呼ばれる城の最外郭線の間の上町（内町）一帯は、町人も暮らした城下町でしたが、この馬出曲輪の築造と周辺の武家地建設にともない、町家の移転がはかられます。移転先は惣構えの西、今でいう東横堀の西側で、これを機に船場の開発が始まりました。また同じ時期、天満の地が城下町に組み込まれます。

重要なのは、江戸時代大坂の中心というべき船場の歴史は、秀吉最晩年の大坂城工事に連動して始まったということです。現在の北御堂・南御堂の位置もこの時期に定まりますが、当初は、開発が始まったばかりの船場の西のはずれでした。

船場は秀頼の時代にかけて開発が進み、さらに大坂の陣のあとの復興とともに市街地化します。城下町が拡大した方面を豊臣時代からたどると、当初は、城周辺の上町から南、四天王寺方面でした。それが秀吉最晩年になると上町から西方面への拡大が始まり、市街の中心は船場へ移っていきました。徳川時代にはさらに西、西船場へと広がります。今でいう中央区から西区方面へ、ということになります。西船場は海に近い低地だったことから多くの堀が開削されて排水と土地の造成がなされ、橋が架けられました。



▲ ドーンセンター敷地北側の
「豊臣期大坂城の石垣」（移築）を確認することができる現場。

市街地の西への拡大は、木津川を行き止まりとし、次の段階として北と南へ拡大の向きを変えていきます。大坂の陣から 70 ～ 80 年くらい経った元禄年間（1688 ～ 1704）になると、北にあたる中之島や堂島、そして曾根崎新地（北新地）の開発が進められました。これに対して南は、今の市立中央図書館のある堀江の開発に続き、道頓堀を越えてさらに南へと広がります。これが「難波新地」です。このころまでに形成された市街地の規模は、幕末から明治 20 年（1887）ごろまでに発行された各種の大坂（大阪）市街図により、明治の前半ごろまでほぼ変わっていなかったことがわかります。その後、市街地は都市化や工業化によって劇的に拡大しました。

さて、ここまで城下町大阪の拡大過程を概観してきましたが、その中で特に強調しておきたい点をあげます。

そもそも「おおさか（歴史的には「大坂」、現在では「大阪」）」という地名は、戦国時代には決してメジャーではありませんでした。蓮如上人は、大坂に坊舎を建てたことに関し、手紙で「摂州東成郡生玉ノ庄内大坂」と語っています。つまり大坂は、「摂津国」の「東成郡」の「生玉の庄」の中にあるマイナーな地名だったのですが、現在は「大阪」だけで通用します。メジャーになったのは本願寺と寺内町の繁栄のおかげで、秀吉が大坂城を築き始めるまでにはすでに全国区になっていたのです。本願寺の存在を抜きに「おおさか」という地名を語ることはできません。

大坂に形成された、本願寺を中核とした寺内町は、大坂城を中核とする城下町に更新されました。新たな武家の支配者が拠点を定める際、それまで通用していた地名を変更する例が当時多くありますが、大坂については、かつてここを攻める側に立っていた秀吉でさえ、地名を変えていません。大坂という地名の生命力、大坂という「場所の力」の強靱さをあらわしているといえるでしょう。

拠点・本願寺

さらに指摘したいのは、本願寺の拠点だった場所に秀吉が大坂城を築き、さらに徳川幕府が城を再築していったことの意味です。一見当たり前のように思うかもしれませんが、戦国時代から統一政権の時代にかけて、地域の拠点が変わらなかった、あるいは築城の場所が変わらなかったという点は注目してよいと思います。この時期、山城から平城へ拠点を移し、城下町を整備して家臣の集住や商業や流通の振興をはかる、あるいは新たな統治者が新たな城地を選定する事例がたくさんあるからです。

大坂の場合は同じ場所に拠点が繰り返し築かれ、動いていません。これは、本願寺のあった場所がすでに最良であって、次に入った統治者がここよりもふさわしい場所を選ぶ、という余地がなかったとの理解が成り立ちます。

本願寺が退去したあと、大坂においては最終的に船場に北御堂、南御堂が創建されて定着するわけですが、すでに申し上げた通り、創建時は船場の町はずれに築かれました。ところで、北御堂は「津村別院」、南御堂は「難波別院」とも呼ばれます。これは、もともと船場の西側に所在した村落「津村」「難波村」との境目に創建されたことに由来します。境目に創建された両本願寺が信仰の中心となって人が集まり、これが市街地の西への拡大の重要な推進力の役割を果たしました。今でこそ両本願寺は市街地の中に吞み込まれている印象を受けますが、城下町大坂の重要な構成要素として本願寺があること、また城下町の拡大発展に大きく寄与した点を心に刻みたいと思います。

大坂にも「サムライのくらし」があった

今から30年以上前、私は「徳川時代の大坂城を専門分野とする学芸員」として、大阪城天守閣に就職しましたが、研究に取り組む際、「幕府の影の薄い、町人のまち大坂」という、従来型の「大阪的」理解との折り合いがつけづらかったことを覚えています。江戸時代、大坂で暮らす町人たちにとって大坂城はどのようなものだったのだろうか（全く無関心ではないと思うが）、大坂城における武士の勤務や生活はどのようなものだったのか（ずっと城内にこもりきりだったわけではないと思うが）。こうした自問自答は、江戸時代の大坂城を素材とした事実がこれまで本格的に発掘され、評価されてこなかったことに由来します。

明治維新以降、日本では各地で「遅れた封建社会の克服」「徳川の世の否定」が目指されました。しかし、やがて急激な近代化への戸惑いと反省から「自国の歴史」への回帰、さらにサムライの時代の方がむしろよかったのではないかという再評価の動きが起ってきます。城下町に由来する国内の大半の都市においては、改めて自分たちの暮らす場所が城下町だと意識して光を当てる動きが起きました。ほとんどの城下町は徳川政権下をモデルとしましたが、大坂の場合は、光をあてるにふさわしい過去として、徳川ではなく豊臣を選びました。近代の大阪で「徳川の城下町」という発想が育たなかったことも、「武士の存在が感じられない町人の都」という理解に大きな影響を与えていると思います。

こうした「町人の町」理解に強く再考を促されたのが、関西大学名誉教授の藪田貫先生です。藪田先生は、「武士の町」大坂を提唱し、江戸時代の大坂における武士の数、果たした役割、町人社会との結びつきを多くの史料から明らかにされ、武士の存在や役割を組み込んだ近世都市大坂の歴史像の構築を試みられました。また京都大学の岩城卓二教授は、江戸時代の大坂城が果たした軍事拠点としての役割を重視して実態を明らかにされるとともに、大坂城を支える近隣大名の役割などについても重要な指摘を行っております。

お二方のご研究に学んでいる私も大阪城天守閣でも、『徳川時代大坂城関係史料集』を継続的に刊行し、大坂城に勤め、大坂城に暮らした大名やその家臣、大坂城に出入りした町人など、様々な役職や勤務にかかわる史料を翻刻し紹介しています。

私個人としては、徳川政権による全国統治の拠点とされた大坂城の果たした政治的役割に特に興味があります。少なくとも「江戸時代の大坂城は將軍の城だったが、留守番の役人がいただけ」などといった誤解を解き、江戸時代の大坂も大坂城を中核とする政治的中心地であり、「お上」のいる場所でもあった事実を明らかにしようと考えています。

『徳川時代大坂城関係史料集』の刊行を進める中で、大坂城内における武士の勤務内容や日常生活もだんだんわかってきました。

それまでは、徳川時代の大坂城に女性が暮らしていたかどうか

はっきりしていませんでしたが、発掘された史料によって大坂城代・大坂定番（じょうばん）といった重役クラスの大名は、大坂城の二の丸の中にそれぞれ屋敷を与えられ、妻子と生活を共にしていたことが確かめられました。

徳川時代の大坂城には、城代や定番という大坂や西国の統治にも携わった重役大名以下、多くの武士が駐在していました。各大名の家臣、城の警備や備蓄物資の管理に携わった旗本や中下級の役人、さらに武士とはいいがたい使用人なども含めると、城内には4000人前後はいたのではないのでしょうか。これだけの人が大坂の町と無関係に生活を送ることはできません。今後も史料の発掘や紹介につとめ、「サムライの仕事や暮らし」を組み込んだ江戸時代大坂の姿を明らかにしていきたいと思います。

町人が見たサムライ、町人が見た大坂城

江戸時代の大坂は、他の一般的な城下町と比べると独特といえます。城下町の代表的な景観である武家屋敷は、城主の家臣団が定住する場所ですが、将軍の持ち城だった徳川時代の大坂城の周囲には、一部の下級役人をのぞき、家臣団が代々定住する武家屋敷はありません。大坂には、赴任した大名や旗本・御家人、大名や家臣やその家族が、城の内外に与えられた屋敷や役宅などで生活したので、これを武家屋敷というなら、大坂における武家屋敷は頻繁に人が入れ替わるという特徴がありました。入れ替わり立ち替わり様々な武士が訪れるので、武士が大坂の町と接触する機会や頻度は他の城下町よりむしろ高かったかもしれません。

その武家屋敷ですが、場所は今の大阪城内だけではなく、周辺にも広がっていました。南は現在の空堀付近まで、西は谷町筋近くまで、東は今の大阪環状線付近までありました。強調したいのは、こうした城外の武家地には町人が比較的自由に往来でき、武士や町人の交流の場にもなっていたことです。こうした環境のもと、大坂町人が大坂城に向けた視線、武士たちに向けた視線をうかがうことができる例を紹介します。

まず、錦絵をはじめとした大衆向けの絵画に大坂城が多数描かれていることが指摘できます。連作錦絵「浪花百景」では「錦城の馬場」「筋鐘御門」が代表作で、ほかにも「浪花三幅対」という錦絵作品には、大坂を代表する美人三人と、代表的な橋（天満橋・天神橋・難波橋）、そして大坂城を描いています。美人三人のうち、一人は武家の女性です。大坂の町や人の魅力を自慢したこの作品に、武家の女性と大坂城が入っているところが重要です。

次に、大坂城の周囲が行楽地として開放されていた事実を紹介します。場所は大手前に広がる芝地、および玉造口外側の「杉山」と呼ばれた一帯（今の森之宮噴水公園付近から玉造口に至る一帯）でした。大手前の芝地は、今の大阪府庁や大阪府警本部の付近まで広がっていました。ここは町人にとって絶好の凧揚げスポットで、凧揚げや見物をする人目当ての出店も建ちました。売り上げは当時

の大坂でもトップクラスだったそうです。玉造口外側の杉山も同じく遊び場スポットでした。夜、ここを通りかかった武士が、木に引かかった、恐ろしい般若の面を描いた凧を目にして腰を抜かす瞬間をあらわした錦絵作品もあります。武士と町人の視線の高さが非常に近かったことがうかがえます。



▲ 浪花百景第1景 錦城の馬場 / 第51景 筋鐘御門（いずれも歌川国員画）

最後にもう一例、紹介します。10年以上前、民俗学者の田野登さんのお手伝いをして、「淡路名高古狸物語」という幕末の資料を読みました。淡路島に住むタヌキの柴右衛門（芝右衛門）が人間に化け、評判の芝居を見物しようと道頓堀を訪れたところ…といった、よく知られた筋書きとは異なる柴右衛門の物語を紹介した文献です。

その中に、柴右衛門が能勢の小源太狐と秘術の競い合いをしたところ、小源太狐にだまされて命を落としたというストーリーが紹介されています。舞台は大坂城の大手前で、ここで小源太狐は秘術により大名行列に化け、見物した柴右衛門が感嘆の声を上げたところ、実はこの大名行列は本物で、柴右衛門は武士の弓によって射殺されてしまった、という筋書きです。大坂城が徳川将軍のもので、大名が赴任しているという現状を前提とし、江戸時代における大衆文芸に自然な形で組み込まれ、魅力あるストーリーになっているのです。

大坂の庶民が、徳川大坂城や大坂の武士たちを無視するでもなく、恐れて避けるでもなく、反発するでもなく、受け入れながら付き合っていた事実を、今後の「大阪的」再構築にあたって考慮に入れていただきたい、と思うのです。

宮本裕次

2022年4月から2026年3月まで大阪城天守閣館長。

専門は日本近世史・地域史。

大阪城天守閣では学芸員として、近世から現代に至る時代をテーマとする展覧会を手がけた。また徳川期における大坂城の実態解明にも取り組み、史料集の編集や論考の発表を行っている。

◎この統編としての「大阪的」報告は、7ページの「大阪的シンポジウム」で宮本先生ご本人からお聞きすることができます

羽雀塗荘コレクション 大阪モダン だいまるの巻①



摂津名所図会「心齋橋筋呉服店松屋」(1796～1798)

今号より、橋爪節也先生の所蔵品の中から、大阪の暮らしや文化に根付く“大阪モダン”な資料を連載形式でご紹介する企画『羽雀塗荘コレクション 大阪モダン』の掲載を開始いたします。

第1弾として、本年心齋橋店が開業 300 周年を迎える大丸百貨店を特集。

『摂津名所図会』にも描かれている大丸百貨店は、享保 11 (1726) 年の開業以来、変わらぬ場所で大阪の人々の生活を彩ってきました。店頭には大きなのれんが掲げられ、通りを盛んに行き交う人々のすがたも窺えます。

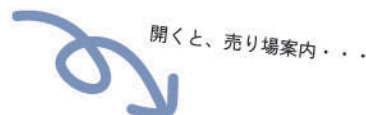
また、昭和 8 (1933) 年、御堂筋に面して、ヴォーリズの設計により水晶塔（クリスタルタワー）のそびえる新しい店構えが完成します。

「全館完成御案内」は、両面に描かれた外観のイラストに沿ってカットが施された巻き三つ折りのパンフレットです。建物の地下には当時開通したばかりの地下鉄が描かれるなど、細部にわたりユーモアを感じさせます。

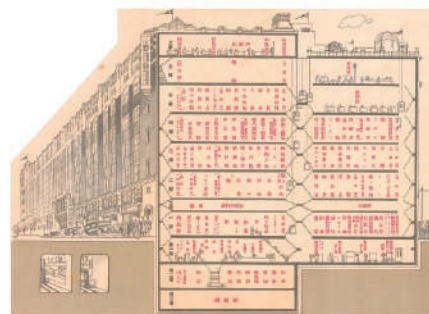
案内図としての機能だけでなく、手に取るだけで心が躍るような遊び心の詰まったデザインからは、大丸の洗練されたセンスと大阪への愛着が窺えます。当時の人々が、このモダンな案内図を片手に心ウキウキ、新しい百貨店へのお出掛けに胸を弾ませた様子が目に浮かんでくるかのようです。



全館完成御案内 (1933)



地下鉄が走る様子も



屋上のラインで切り抜かれているのも豪華!!

「全館完成御案内」を開いた状態
(上・内側 / 下・外側)

今後もさまざまなテーマを特集。大阪文化の継承や、まちの文化的な賑わいに貢献してまいります。

今回は、だいまるの巻②として、図案家・森脇高行らが手がけたモダンなパンフレットをご紹介します。

300 周年特別プロモーションが展開中

大丸心齋橋店（大阪市中央区心齋橋筋）は開業 300 周年を記念して、2026 年 3 月 6 日～11 月 26 日までの 9 ヶ月間、特別プロモーションを展開しています。そのスローガンは、いづれ来店されても「飽きない」百貨店でいること、また、これから先も「商い」を続けていくことを誓いに込めた『ずっと、あきない。』です。

商いの中心において、大阪の豊かな文化芸術に向けるまなざしには、300 年の歴史を共にしてきたまちへの感謝が込められていると伺いました。



▲ 300 周年記念ロゴのオリジナルのれん。
手塚治虫先生のマンガ「火の鳥」とコラボレーション。

橋爪節也

大阪大学名誉教授。1958 年、大阪市南区（現・中央区）生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館・館長を歴任。専門は日本美術史。木村兼葎堂、北野恒富、佐伯祐三など大阪ゆかりの日本を代表する文人、画家の展覧会に多く携わる。著書に「大大阪イメージ 増殖するマンモス / モダン都市の幻像」(創元社) など多数。

はすずめとそう
◎「羽雀塗荘」は、橋爪節也先生の生家が塗装業（橋爪塗装工業）を営んでいたことにちなんでいます。

ミュージアムな「ご縁」 北御堂&御堂筋

大阪的
シンポジウム 2026

ミュージアムな「ご縁」 北御堂&御堂筋

▲写真：「北御堂芸術祭ーあそびアート」にて
カメラによる大階段の読み

2026年9月5日（土）13:30 - 16:45

会場 浄土真宗本願寺派 本願寺津村別院（北御堂）2階ホール
大阪市中央区本町 4-1-3 <Osaka Metro 御堂筋線・中央線 本町駅スグ>

参加申込はこちらから▶



浪花百景 第70景 真宗本願寺：絵巻の金面として北御堂 大階段が描かれている。

主催：（一財）大阪市コミュニティ協会 共催：大阪大学中之島芸術センター、（一社）御堂筋まちづくりネットワーク、
北御堂ニア（北御堂芸術祭実行委員会） 協賛：浄土真宗本願寺派 本願寺津村別院（北御堂）、
（一社）船場倶楽部、専門学校 大阪デザイナー・アカデミー、NPO法人 もうひとつの野くら

“大阪的”ってなんだろう？
そんなことを考える、
シンポジウムを
今年も開催します。

かつて、「商都・大阪」は大阪を体現する象徴の
ような愛称でした。ですが、近ごろこれをあまり見
かけなくなったように感じます。

「観光ビジネス」が都市産業の大きなジャンルに
育つなど、消費形態がより直接的になったことで、
都市を体現する表現にも、確かな工夫が求められる
時代になりました。

本紙を『大阪的コミュニティのニュースレター』
と名付けたのは、大阪大学名誉教授・大阪大学総合
学術博物館元館長で、美術史家の橋爪節也先生と協
働し、2023 年から毎年継続して開催している『大阪
的シンポジウム』がきっかけです。

「ステレオタイプな視点を問い直し、大阪を“異
なる視点”で見つめ直す」と、より深みがあり楽し
いのではないかと・・・ということでした。

この気付きから「大阪的って何？」を共に考える
“大阪的”コンセプトが誕生し、シンポジウム運営の
方向性が示され、ニュースレターの編集方針も固ま
りました。なお、『大阪的シンポジウム』のこれま
でのテーマ、並びに基調発表者は次の通りです。

◎『大阪的シンポジウム』テーマ

— 2023 年「水辺から考える“アート おおさか 大阪暮らし”」

— 2024 年「浪花百景・未来景 - 大阪と京都の二都物語 EXPO70 がのこしたこと」

基調発表者：国際日本文化研究センター所長 井上章一先生【建築史 / 文化史 / 風俗史】

— 2025 年「大阪ヴィジョン 歴史と文化のポテンシャル @ 北御堂」

— 《開催予定》2026 年 9 月 5 日（土）「ミュージアムな『ご縁』 北御堂&御堂筋」

基調発表者：大阪城天守閣・館長※ 宮本裕次先生【日本近世史 / 地域史】

※2026 年 4 月 1 日より、同・学芸顧問

「大阪的シンポジウム 2026 ミュージアムな『ご縁』北御堂&御堂筋」

開催日時：2026 年 9 月 5 日（土）13:30 - 16:45

会 場：浄土真宗本願寺派 本願寺津村別院（北御堂）2 階ホール

※参加には資料代 500 円必要。要・お申込み。

参加申込はこちらから▶



北御堂の“磁場”

江戸時代の国際交流と
「北御堂芸術祭—あそべばアート—」



文：波瀬山祥子（日本女子大学国際文化学部 助教）

《前回から続き》朝鮮通信使と日本の画家たちが、具体的にどのような交流を行っていたのか、イメージが湧かない人もいるだろう。近年、日本美術史の分野では、江戸幕府から朝鮮王朝に贈られた屏風、いわゆる「贈朝屏風【ぞうちょうびょうぶ】」の実物やその下絵の発見が相次ぎ、日韓双方で活発な研究が進められている。これらは主に、幕府の御用絵師を務めた狩野派が手がけたものであった。

一方、市井の画家による作例としては、大坂の博物学者・木村蒨葎堂【きむらけんかどう】（1736～1802）が制作した「蒨葎堂雅集図巻【けんかどうがしゅうずかん】」（韓国国立中央博物館所蔵）が挙げられる。この図は、明和元年（1764）の朝鮮通信使来日時、蒨葎堂と大坂・京の文人たち、そして通信使との交流のなかで制作されたものであった。ながらく所在不明だったが、なんと 2007 年に再発見され、制作背景について重層的な研究成果が蓄積されつつある。

なに言う・・・このニュースレター 6 ページの連載者である橋爪節也先生は、木村蒨葎堂研究の第一人者である。筆者自身、これらの「大阪的視点から」多くの指導ご教授を賜ったことは言うまでもない。なお、「蒨葎堂雅集図巻」は韓国国立中央博物館のウェブサイト上でも閲覧可能であり、これが韓国国立中央博物館に「コレクションされている」という「間柄」であることを知った時、ことさら興味深い感慨を得たことを付け加えておく。

前回、このページで取り上げた「春卜【シュンボク】と李聖麟【イ・ソンリン】」との交流は、蒨葎堂が朝鮮通信使と交流をもった明和元年の一つ前、寛延元年（1748 年、7 月 12 日に寛延へ改元）の出来事である。当時、北御堂で展開されていたであろう、国家を代表する使節団に随行してきた画家と大坂の「市井の画家」との、絵画制作を通じたリアルな交流の様相は、これも、前回このページで紹介した『家彪集【かひょうしゅう】』から読み解くことができる。（この詳細は専門的に過ぎるのでここでは割愛する。）

しかし、「これら一連の事柄」が極めて興味深いのは、当時大坂の船場において生活していた人々が、国家を代表する使節団との交流で、しかも「史実として正確に残る交流」を、「担っていた！」という事実なのである。

■編集後記

4 ページ構成の発行を計画しているニュースレターですが、皆さんにお知らせしたいことがたくさんあったため、第 2 号目は何とその倍、全 8 ページの特別仕立てになりました。お楽しみいただけましたら幸いです。
大阪的「まち歩き感覚」のニュースレターでありたいと日々アンテナを張り巡らせています。まち歩きへのヒント、取材すべき街「あれこれ」等、情報がございましたらぜひ右に記載のメールアドレス宛てにお送りください。ご感想もお待ちしております。



▲重要文化財 谷文晁による木村蒨葎堂像
木村蒨葎堂と生前親しく交流のあった江戸南画の巨匠・谷文晁が描く蒨葎堂の肖像。
大阪府教育委員会蔵（大阪市立美術館寄託）

この春 4 月から活動の拠点を東京に移しました。だからこそ「今、改めて感じる」のは、これら全般が「大阪的」の象徴事例であるのではないかと、ということです。

大阪市コミュニティ協会は、（主催者として）2026 年 3 月に開催された『北御堂芸術祭—あそべばアート—』を成功に導いたとお聞きしています。おそらくそれは、北御堂が内在させてきた「日本的で大阪的なコミュニティの文脈」をゆるやかに共有し、“新しいコミュニティの物語を紡ぐことのできる可能性”を示されたのだと思います。

そんなことを感じるようになりました。

（2026 年 6 月、東京の地から）

編集室より

大阪大学総合学術博物館に（2026 年 3 月末迄）勤めた波瀬山先生は、この 4 月から東京の日本女子大学に移られ、引き続きこれら専門分野の研究に邁進中です。前回、「編集室より」で「全 4 回にわたって掲載します。」と記述しましたが、これは、ブログ版(note)に掲載する回数が 4 回であり、本紙ニュースレターでは都合 2 回の誤り「これが最後回」です。お詫びし訂正いたします。

《編集・発行》

一般財団法人 大阪市コミュニティ協会
大阪的コミュニティのニュースレター 編集室 編集担当・李有師【り ゆうじ】

《お問合せ》

〒541-0055 大阪府大阪市中央区船場中央 1 丁目 3 番 2-302
✉ contact@osakacommunity.jp 代表電話：06-6125-3311

